
コネクト。

朱璃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

コネクト。

【Nコード】

N0607Y

【作者名】

朱璃

【あらすじ】

幼なじみとの追いかけっの中に事故ったオレ。次に目が覚めたのは、見覚えのない『日本』だった。確かに日本であるはずなのに、常識がまったく通用しない。それどころか、幼なじみからは「お前誰だ」と言われる始末。ここは一体なんなんだ！？オレ、帰れるんでしょうか。

今はいなくても

今日はばあちゃんの十三回忌だ。

ばあちゃんが亡くなった日、本当はオレも一緒に買い物に行く予定だった。だけど前の日に熱を出し、当日も外出ができる状態ではなかった。熱に浮かされながらも相当な駄々をこねた覚えがある。

あの時一緒に行っていたら、ばあちゃんは車に轢かれなかったかもしれない。幼いオレの歩調に合わせて歩いていれば、事故には合わないで済んだかもしれない。そう思ったことも一度や二度じゃない。

だけどそんなことを言ったら、散々叔父さんから怒られた上に泣かれてしまった。母親を急に失った叔父さんはもつと辛かっただろうに、幼かったオレはそんなことを氣遣う余裕も無かったんだ。

ばあちゃんはいつでも凜と立っていて、何があっても笑い飛ばしてしまうような人だった。親父や叔父さんが弱気な時でも、痛いくらいの力で背中を叩かれたらしい。じいちゃんはオレが産まれる前に亡くなっていて、その時もばあちゃんは弱った様子を見せることもなく葬式の喪主を立派に勤めたらしいが、夜みんなが寝静まった時に泣いているのを見た叔父さんが語っていた。

「上総かずさ……！」

階下から母ちゃんの怒鳴り声が響いて、オレは慌てて部屋を飛び出そうとした。そして、違和感。

なんだろうと思って部屋を見渡すと、いつもは大事に引き出しにしまっているばあちゃんの形見が、机の上に出っぱなしになっていた。

オレ出したっけ？

破損したり紛失したりしたら嫌なので持ち歩くことはなく、いつもはしまったままにしてある。

首を傾げるが、十三回忌ということで少し感傷的になって出してしまったのかとも思い、クッション性のある小振りな巾着に入った形見を手にとった。しかし、引き出しにしまおうとして手を止める。オレは靈感があるわけでも勘のいい方でもないが、なぜか今日はこれを持っていった方がいい気がしたのだ。

ばあちゃんもオレと一緒にいたいのかな、なんてらしくもないことを思いながら、教科書に漬されないよう丁寧に鞆の奥にしまった。

母ちゃんの二度目の怒号に急かされて、オレはやっと部屋を飛び出した。

日常は一瞬で

秋も終わり、冬に足をつっ込み始めたこの季節。身を切るような寒さの中、オレはチャリで疾走していた。

オレの目の前には、何の因果か幼稚園からずっと一緒だという腐り切った縁のある幼なじみ。こともあるうに、ちんたらと自転車を漕いでいたオレの頭を、スピードが乗ったまま後ろから勢い良く叩き去ってくれた。はた

「うおらタケー！」

白い息を吐きながら全力でペダルを漕ぐが、全く距離が縮まらない。というかむしろ離れてる！？なぜだ、同じスペックのママチャリであるはずなのに……。

オレ達が通う高校に行くには、街を一望できる大きな丘を越えなければならぬ。山というほど傾斜がキツイわけでは無いが、やはり自転車には辛い坂であることに間違いはない。

もう駄目だ、座ってんのに立ち眩みが起きてる、オレ。

荒くなった呼吸のせいで、容赦無く冷たい空気が入り込んでくる。あいつ、学校着いたらウィリーして轢いてやると心に誓いながらも、どんどん減速していく。

遅れ始めたオレに気付いたのか、スピードを緩めないままタケが振り向いた。

「ヤダー、上総ちゃんたらギブアップ？」

にんまりといやらしい笑いを浮かべてくるタケにかちんとして、力を振り絞ってスピードを上げた。

「このエロ目っ！変態くせえぞっ！」

「なんとも言えばー」

息も絶え絶えなオレに対し、疲れた様子もないタケに戦慄する。化け物かこいつ。

なんだかんだと悪態をついていたが、酸欠でもう駄目だと再びスピードを緩めようとしていたら、ついに待ち望んだ下りがやってくる。反撃のチャンスとばかりに軽くなったペダルを漕ぐが、まあ当然相手だって同じ条件なわけで。憎らしいくらいにスイスイと坂を下っていくのが見える。

いい加減馬鹿らしくなって、漕ぐのを止める。それでも下りのスピードに乗り始めた愛機は、冷たい風が耳に痛い程度には快調に走ってくれた。

もうすぐ学校に着くと思い、暢気に片手運転しながら鞆の中の携帯を取り出そうとしたオレの耳に、何かが擦れるような甲高い音が響いた。

振り向いた時にはもう、シルバーに鈍く光る車のボディが目の前に迫っていた。

甲高いスキル音が響き、たけと健人は急ブレーキを掛けながら振り向いた。

目に飛び込んできたのは、吸い込まれるように上総に突っ込んでいく車。驚いて自転車ごと転ぶ上総。そのまま車は、ガードレールにめり込んで停車した。

嘘だろ。

健人は自転車を道路に叩きつける。震える脚を叱咤しながら駆け出した。

申し訳ないと思いながらも運転手の安否は後回しにさせてもらい、ガードレールと車体の隙間に身体を捻じ込んで上総の無事を確認しようとした。よく見ると、上総の自転車がガードレールと車に挟まれてひしゃげていてぞつとする。

上総の姿を確認できずに車の下を覗き込んでみるが、そこにもいない。

ガードレールの外側は急斜面になっている。まさかそこに落ちたのかと思ひ慌てて身を乗り出すが、そこにも上総がいる気配はない。どこにも血痕らしきものも無い。

何が起きているのか理解できずに後退ると、黒くタイヤの跡がついた地面に、上総の鞆が落ちていた。鞆からは中身が飛び出して散乱している。教科書に混じって和柄の綺麗な巾着から、手鏡が飛び出していた。

幼なじみである健人は、それが持ち出されるはずのない上総の祖母の形見だと知っていた。健人は顔を顰めて手鏡を怪訝に見つめる。

あれだけの事故にあつたにも関わらず、鏡は割れもせず光を反射していた。

ひたすら救いを待つばかり

暗いな。つーか痛え。当然か、事故ったわけだし。ヤダ、全身打撲かしら。

若干混乱気味でおねえ言葉が混じったことにも気付かず、恐らく寝転がったままで辺りを見回す。完全な闇に放り出されている。

ああ、もしかしてここは地獄なのだろうか。天国のばあちゃん、オレなんか悪いことしたっけ！？悪い幼なじみにそそのかされて小さな悪戯はちよつと……いやまあ多々したが、地獄の直行便に乗せられるほどの極悪非道な行為はしてないはずだ。

痛む身体に鞭打って、なんとか両手を床について身体を起こした。よかった、床はある。もしこれで手が宙を切ったら、地獄説がますます有力になってしまつところだった。それが不思議な国に落下中説。少なくともオレには、ウサギを追い掛けた覚えも穴に落ちた覚えもない。

とりあえず身体が痛いということは、オレはまだ生きているのだろうか。

つーかさ、何これ放置プレイ？仮に地獄だとしても天国だとしても誘拐……は無いか、特に金持ちでもないし。だとしても、迎えが来るのがセオリーってもんだろ。怪我人を暗闇に放置って人としてどうなのよ。いやまあ怪我してるかどうかは自分でも分からないんだけども。

こうしていても仕方ないと両腕に力を込めて立ち上がる。障害物が無いか確かめるために手を前方へ彷徨わせると、案外すぐ傍に柵

か何かが存在したらしく、派手に物を落としてしまった。よかった。手を出してなかったら激突するところだった。

むやみに動かない方が得策かとは思ったが、ここにいて必ずしも状況が変わるとは限らない。むしろこのまま迎えの気配も無く放置されて餓死するのは免れない。

何度か方向転換してうろついていると、暗闇に一筋の光が射し込んだ。

もしかしてついに天国か極楽浄土からのお迎えが！？と思ったのも束の間。暗闇に慣れた目にはその光は少々きつかった。

ああああ何これまったく目に優しくないお出迎え。

反射的に目を細めていたオレの前に、影ができた。どうやら誰か立っているらしい。人が立っていると認識した瞬間、強く腕を掴まれた。

「貴様、ここで何をしている！？」

驚いて咄嗟に腕を振り払うと、相手はさらに強い力で掴み直してきた。

やべえ、「貴様」とか本気で言う奴いるんだとか呑気に思ってる場合じゃなかった！

慌てて説明しようとしたが、目が覚めたらここにいたんだから説明のしようがないことに気付く。

どうやら『誰か』は二人いたらしく、反対の腕も掴み上げられてしまった。オレは囚われた宇宙人のような状態ですると光の方へ引き摺られる。ほんと優しさの欠片も無いね！バ アリンを見習え！

「うわああああ、すいませんごめんなさい勘弁してください。てかあんたらどちら様で！？」

「黙って歩け、こそ泥が」

こそ泥！？こそ泥って何！何も盗んでないですけど！？

光が射していたのはドアだったらしく、そこを抜けるとただ広い空間が広がっていた。出てすぐ目の前には、胸の位置までありそうなガラス張りの手摺り。吹き抜けになっているらしく、手摺りのすぐ下は大きく空間が開いている。大型のデパートのような造りで、手摺りで囲まれた廊下の壁側には、いくつもドアが並んでいた。

引き摺られたままエレベーターに乘せられる。オレを捕えている謎の男Aが操作するボタンの数字を見て、ぎよっとする。

三桁！？三桁あるよ！？間違えてない、お兄さん？

どつりで階数分だけのボタンがないはずだ。見る限りあるのは、0から9の数字と、AからZのアルファベット。それでも十分多いけど。大体アルファベットは何に使うの。地下ならBがありゃいいじゃん。

それにしても……。

オレは横目で謎の男AとBを見る。

彼らは無駄にでかくて軍人のような格好をしている。別に迷彩服を着ているわけじゃないけど。むしろ真っ黒な服だが、外国の映画に出てくるようなカッコいいデザインだ。

いかにもどこかの組織に所属してますって雰囲気と黒ずくめのちよつとかっこいい服装により、オレの中での彼らの呼び名はオシャレシヨツカーに決定した。

しかし気まずい。

オシャレシヨツカー達はオレの腕を掴んだまま、私語の一つもしない。

ただでさえこんな状況じゃなくても他人と乗り合わせるエレベーターってのは気まずいもんなのに、なんだこの重い沈黙は。ここは一発ギャグを飛ばして場を盛り上げた方がいいのだろうか。いやいやいや、しっかりしろオレ。血迷うな。結果は見えている。どうせ冷たい目で見られて「黙れ」とか言われるんだ。ああ、ただでさうど！耐え切れないんです！

何しろまだエレベーターの現在地は二桁の階だ。いくら普通のエレベーターよりもありえない速さで進んでいるとはいえ、一体ここからどれだけの時間を費やせば目的地に辿り着くのか見当もつかない。

その時、救いのようにエレベーターが停止した。

誰でもいいからこの状況を打破してくれと願っていると、開いたドアから姿を現したのは小学生くらいの幼い少女だった。

横道に逸れました

なんだこのちびっこは。オシャレシヨツカーの仲間か？ちびっこギャング？

「何をしている？」

謎の少女が口を開くと、オシャレシヨツカー達が畏まって敬礼していた。

「水瀬博士、お疲れ様です」
博士？

よく見るとそのちびっこは、背丈に似合わない長い白衣を着ている。しかも口調が偉そう。ここの上下関係ってどうなってんの。

数年後が楽しみになる綺麗な顔を顰めて、ちびっこはオシャレシヨツカーAを見上げた。

「なんだソレは」

『ソレ』ってオレのことデスヨネー。すでにオレには人権も存在しないのか。

「はっ。第三倉庫で怪しい行動をしていたので捕獲しました」

「第三倉庫で？」

さらに眉間に皺を寄せると、ちびっこはオレを見上げる。

「お前、どうやって入った？軍に志願しに来たのか？」

「は？いやいやいや、オレ根性ないんで。自衛隊に入る気はまった
く」

思わず敬語を使ってしまう。だってオシャレシヨツカー達が睨んでる気がしたし。

「では無理矢理連れてこられて逃げ出したのだな」

「いやだから」

「恐れながら博士」

「なんだ」

「第三倉庫には鍵が掛かった状態でした」

「だったら尚更能力者である可能性が高いだろう。空間移動が透過能力といったところか。なぜ確認に連れてこない」

「得体のしれない能力など危険です！しかも第三倉庫にいるなど！」

「まあ嚴重な処罰の対象にはなるだろうが。得体のしれないままに放置しておく方が危険だとなぜ分らない。もし予想が当たっているなら閉じ込めたところで無駄なだけだ」

ちびっこ博士サマの言葉に、オシャレシヨツカーがぐつと詰まる。

「この者は私が預かるう」

ちよ、ペットが何かと勘違いしてない？てゅーか処罰って、オレ処罰されんの！？

「着いてこい」

オシャレシヨツカーはまだ何か言いたげにしていたが、ちびっこ博士はそれを無視して隣のエレベーターに移動した。

うわー、超睨まれてる。

不満げなオシャレシヨツカーを残し、オレはちびっこ博士に続いてエレベーターに乗り込んだ。

細い指が数字を入力するのを見ながら、オレはさっきの会話を反芻してみる。

能力者って言うってたよなあ。何、ここでは普通に超能力とか使えちゃう人がぞろぞろいんの？もしかして世間に隠れて怪しい実験とかしてる秘密結社？なんたってシヨツカーだしなあ。なんとかライダー的なのも出てくんなのかな。

ぼんやりそんなことを考えていると、独特の浮遊感が消えて、ありえない重力が掛かってよろめいた。

なにいゝ！？横Gだと！？

明らかに先程とは違う位置に動いている。確かに順調に下つていたエレベーターが、右に移動しているのだ。さらに少し経つと、今度は前方に移動する。

目的の階数を表示する液晶を見ると、表示は4BGとなっている。もしかしてこのアルファベットは、横移動するための数字なのだろうか。

「私は水瀬紅。みなせべに お前の名はなんだ」

突然の自己紹介で紅と名乗ったちびっこは、先程のオシャレシヨツカーとは違い、一応オレの話を聞いてやろうという意志があるようだ。

「篠原上総。なあここつて一体……」

問い掛ける前に目的地に着いてしまったようだ。やけにスムーズに、ドアが音もなく開く。

「地下研究室だ。ここで今からお前の能力検査をする」

地下研究室とやらはワンフロアぶち抜きで造られているのか、学校の体育館何個分かというほど無駄に広かった。天井も驚くほど高い。ドーム球場デス力？

よく分からない機材が所狭しと置いてあつて、あちこちで白衣の人間が忙しそうに動き回っている。子供は見当たらないので、やはり紅は特殊なパターンなのだろう。

「あ、博士お疲れ様です！先程の解析の結果が……って、誰ですかソレ」

また『ソレ』扱い。ちゃんと教育してよ、博士。

「被験者だ」

被験者！？なんのですか！？

「解析結果は後で確認する」

話し掛けてきた研究員らしき女は首を傾げたが、そんなことに構っていられないとばかりに、忙しそうに仕事に戻っていった。

紅がずかずかと機械の合間を縫って歩いていくのを見て、置いていかれないように慌てて追い掛ける。ごちゃごちゃとした中を器用に歩く様子を見ると、昨日今日ここに来たわけではなさそうだ。何歳からこんなとこにいるんだろう。

オレはというと、少なくとも数えただけでも9回は機械や人にぶつかった。その度にペコペコと謝りながら進んでいるので、いい加減腰が痛い。

やっと追い付いた先にあつたのは、小さめのドアだ。どうやらワンフロアぶち抜いているわけではないようだ。もしかしたら研究室はこの階の一角だけなんてこともありそうだ。どんだけ広いんだ。

ドアの横についているパネルに紅が数字を打ち込んで手をかざすと、シュン、と気持ち良くドアが開く。

さつきから思っていたが、今まで見た限り手動のドアが無い。オシャレシヨツカーに引き摺られている時に何か違和感を感じたが、そのせいだったことに気付いた。ドアというドアに取っ手が存在していなかったのだ。停電したらどうするんだろう。

紅に続いて小さなドアをくぐると、そこは理科室のような部屋になっていた。あちこちに使用目的の分からない装置が置いてある。奥の方にある机では、なんだか怪しい色をした液体がぼこぼこ気泡をたてているのが見える。うわー、いかにもな感じ。

「その椅子に座っていてくれ。その辺の物には触るなよ。手が無くなっても知らないからな」

何その予告！？爆発物でも置いてあんの！？

オレは指示された椅子に大人しく座ると、さつき中断された質問を投げ掛けた。

「なー、ここってほんとどこなワケ？特撮ヒーローもののセットってわけじゃないんだろ？」

「お前、ここがどこかも知らずに侵入したのか」

「だから、侵入したんじゃない……」

「王宮だ」

「……………はい？」

「お・う・きゅ・う」

……………「ご丁寧にありがとう。」

何これ異世界ファンタジー？つまりはそーゆーオチってこと？なんか横文字のかっこいい国名が飛び出してくるわけ？でもよく考えたら目の前の少女は日本人っぽい名前だったわけで。あ、アジアンファンタジー？

「ちなみにこちらの国名は」

そう聞くと、はあ？と呆れた顔で溜め息を吐かれた。うう、小学生から馬鹿にされた。

「私はさつきから日本語を話しているつもりだが」

「まーオレも産まれてこの方日本語オンリーしか話せませんが」

「だったら日本以外のどこだと言っんだ」

「日本ですね」

「……………」

「……………」

見つめ合ったまま停止したかと思ったら、またもや長い溜め息を吐かれる。ちよっと、傷つくからやめてってば。

どうやら王道なオチは期待できなさそうだった。

恐怖は人を饒舌にする

どうやら紅は、若い身空で苦勞性らしい。あ、この場合苦勞させてんのってオレ？

「とにかく、採血するぞ」

なんですって？

「腕を出せ」

紅の手には、しっかりと注射器が握られている。

「ちよつと待つて。誰がやんの」

「私以外に誰がいる」

そんな自信満々に言い切られても！

「そういうのはきちんと看護免許または医師免許を持つてる人がやってくれないと！」

どっちかと言うと綺麗な看護師さん希望だが、この際贅沢は言つてられない。

「安心しろ。きちんと持つている」

「はい！？」

いやいやいや、どんだけ飛び級したらその歳で医者になれんの？
アナタ10歳くらいですよね？

「医者つていうのはどのレベルの！？まさかまじないで病氣治すとか言わないよね！？」

「どこの原住民だ。大体それは医者じゃなく祈祷師じゃないのか」

「オレ先端恐怖症なんです！！」

「さつきから注射器をガン見してるじゃないか」

そりゃ恐怖ですよ！

「往生際が悪いぞ」

紅は後退るオレの腕を捕まえて、ゴムのようなものを巻き付けて血を採りやすくする。

「わあああああ！ちよ、堪忍してくださいお代官様！」

「誰が悪代官だ。目をつぶっていればいいだろう」

悪代官とは言っていない。

「ええええそんなこと言われても」

「終わったぞ」

「はっ？」

「だから、終わった」

紅の手には、オレのものと思わしき血液が入った注射器が握られていた。思わず目をつぶったのは一瞬だったような気がするのだが、いつの間に採ったんだろう。それよりも。

「ぜんっぜん痛くなかった……」

「？痛かったら医者である意味がないだろう」

いや、当然のように言うけどね？免許あってもがつり痛みを与えてくれる人つてのは多々存在するわけでして。時には何度も失敗されて、針の跡が一ヶ所では済まないことだってあるわけで。

過去に学校で行われた血液検査を思い出す。

「すっげえ。わけわからん偉そうなクソガキだと思っててごめん」

「……お前正直過ぎて腹立てる気も無くすぞ」

紅は血液を別の試験管のようなものに移すと、近くにあった謎の装置にセットした。慣れた手つきで操作すると、オレの前に置いてある椅子に座る。

「そついやさつきから聞きたいこともツッコミどころも満載なんだけどさ、検査って何？」

「能力検査だ」

「いやだから、なんの能力？」

そつ言つと、珍獣でも見たかのような表情をされる。

「お前……タイムスリップでもしてきたのか？」

「え、一般常識的なものなんですか、それ」

秘密結社が秘密バレてて大丈夫？

お前と話していると埒が明かないと失礼なことを呟き、紅はパソコンらしき機械を操作し始める。どうやら検査とやらが終わったようだ。

紅が何かのボタンを押すと、何も無かったはずの空間に透き通った画面が何枚も浮かび上がる。どういう仕組み、それ？

その空中モニターに紅が触れると、どんどん画面が変わっていった。何枚も展開されたそれを、両手で器用に操作していく。

最後にパソコンを確認すると、紅は無表情の中に確かに驚愕を滲ませた。

「馬鹿な……そんなはずはない」

そしてオレを見ると、明らかに不審な目で睨み付けてきた。

「お前一体……何者だ？」

一体何者？

だから話を聞いてよ。人の話を聞かないお国柄なの？いや、日本でしたね。まあ自分でも何が何やらよく分かっていないため、聞きたいことの方が多いのは間違いない。

「あの……何が？」

「能力が出ていないだけならまだしも、感染していないなんてあり得ない」

「かんせんっ！？」

やだ、何その怖い単語。バイオなんとか的なことが知らないところで起きてたの？

「……本当に何も知らないのか」

「だから、なんの話をしてるわけ。オレは日本の国家機密に関わるような人間じゃないよ。怪しい裏組織の一般常識を話されても何も知らないワケ」

紅は色々と諦めて、腹を括ったようにパソコンを操作し出した。新しく現れた空中モニターの一枚に、世界地図が映し出される。

「ここが日本であることは分かるな？お前が外国にいたというなら話は別だ。恐らくそれはあり得ないと思うが……」

そう言っ指差された日本は、オレが知っているものと若干違っていた。

「いや、日本は日本だし、形も見覚えのある地図だけど……なんでこれ反転されてんの？」

そう、モニターに表示されている地図は、オレが知っているものと左右逆になっていた。よく見ると周りの大陸も逆の場所にあったので、反転されていると思えなかった。

「これは日本政府で発行している正規の地図だ」

「はあ！？そんなはず……」

ない、と続けようとして気付いたことがある。さっき紅が展開したたくさんのモニターを見ると、文字が全て反転して鏡文字になっていた。

「何これっ。国家レベルでひねくれてんの？」

「は？」

「これもこれもこれも、ゼーんぶ反転されてる！」

「お前……自分の名前を書いてみる」

紙とペンを差し出される。

オレは渡された紙にガリガリと名前を綴った。

「名前くらい書けるって」

渡された紙を見て、紅は無表情で言った。

「そうだな、見事な……鏡文字だ」

「はー？」

「器用だな」

「いや、今まで生きてきてずっとこの文字使ってたけど、不自由したことなんてないよ！？」

オレよりもずっと頭の回転が速いらしい紅の方が、冷静になるのも早かった。

……いや、分かってたけどね。なんとなくこの子天才だよねとか分かってたけどね。自分がちょっと情けないとか思わないでもないけどね！？くそう、子供なら鼻垂らして野山を駆け回ってるよ。

「……やはり相互理解が必要なようだな。私から先にこの国のことを説明しようか？」

「お願いしマース……」

正直うまく話せる自信が無かったし、現状を把握することが優先だと思った。

紅は空中にモニターを展開していきながら説明を始めた。

「まずはお前が聞いてきた能力の話だ。この国では13年前からあるウイルスが蔓延している。J・MAGI、一般にマギウイルスと呼ばれる。感染しても命に別状があるわけではないが、厄介な能力を発症するケースが出てきた」

ああ、それで能力検査。

「身体的に発達する者、魔法と呼ばれる力と似たものを扱う者。それぞれに獣眼^{じゅうがん}、魔眼^{まがん}と呼ばれる。能力を使用する際に目の色が変わるから、能力者かどうかはそれで判断するといい」

発動される時に気付いてももう遅いと思うけど。オレはひ弱な現役子だから、もっと有効な判断方法を教えてくれ。というか主に回避方法を。

「日本にいれば一週間以内に必ずこのウイルスに感染する。能力の発症に関わらずだ。だからお前が感染していないというのは、異質なんだ」

「はい先生。さつきも言ってたけど、オレが外国から来たんだったらまだ感染してないって可能性があるんじゃないの？」

「その可能性は限りなく低い。現在日本は鎖国中だからな」

「さこく……!?」

無駄に技術は発達してくせに、なんでそこで退行するのか。黒船が来るのが遅れたのか!?まさかペリーの怠慢か。いいことないよ。サクッと開国しちやいなよ。

「少し前までは他の国との交流もあったんだが……発達した技術とマギウイルスが仇になったな。日本は世界屈指の機械大国で、その技術を渡せと他国からの要求が激しかった。その上謎のウイルスの存在。マギウイルスも他国にとっては無視できないものだったからな」

まあ命に別状が無い上に特殊な能力を手に行けるとなれば、他の国にとっては脅威になる要素がたくさんあるだろうな。研究者や軍にしてみれば喉から手が出るほどほしいだろうし。

「しかも近年軍事大国であるアメリカから強い要請があったこともあって、属国にされることを懸念した国王が鎖国を決定した。今は膠着状態だが、いつ戦争になるか分からない。そんな場合ではないというのに、能力者による内乱は激しくなるばかりだしな」

「戦争……………」

まさか平和ボケしたような国で育ったオレが、日本と呼ばれる場所ですぐに巻き込まれるとは。

紅の話によると、別に技術やウィルスを独占したいわけではないらしい。ただ、それを売ったり公開したりすると、悪用して結局戦争に発展する恐れがある国がいくつかあるという。それが日本に飛び火して、不利な立場になるのを避けたいわけだ。

そんなこんなで鎖国なんて対策を取ってしまったために、攻め込んでくる国を警戒して軍は能力者を高い給与で雇う。能力者は感染者の一角に満たない程度だということで、高い能力を持った人間は無理矢理連れてこられる場合もあるらしい。もちろん戦争のことも含め、国に反発する組織を制圧するためにも、常に能力者の募集をかけているという。反国勢力というのは、いわゆるレジスタンスだ。しかもその組織には能力者が多く存在していて、なかなか抑えることができずに政府も頭を悩ませているとのこと。何より紅よりも若い子供も所属しているらしい。

「あのさ、ここ王宮ってより要塞だよな？そもそもなんで国王が政治に口出すの？総理大臣は？」

「国の研究所や軍が混在しているから、要塞のようになるのは仕方

ない。重要な施設がまとまっていると色々と便利だからな。国王が国を納めるのは当然だろう。総理大臣というのは……宰相のようなものか？」

「……ごめん、質問変える。じゃあ天皇は？オレがいたところでは国王つてのはいなくて天皇陛下がいたんだけど」

「天皇制度は300年も前に廃止されている」

「ええっ!？」

国王がいて天皇はいなくて、宰相がいて総理大臣がない？でも天皇制度は確かにあった。この違いはなんなんだろう。

「まあ、お前が知れたかったのはこれくらいか？他にも細かいことは気になったところから聞いてくれ」

ソウデスネー。もうキャパシティオーバーだ。考えるの苦手なんだって。

「さて、じゃあ自分の異質さを理解してもらったところで、もう一度聞かせてもらおうか。お前は一体何者だ？」

ヤダ、ずっと無表情だった子が笑ってるわ。てか目が笑ってねえ。怖いヨー。確かに、確かにね？オレがまだ不審者であることには変わりないけどね？

ガリガリと頭を掻きながら、オレは椅子の上であぐらをかいだ。

夜明けはまだまだ

「お前の言う日本と、ここが違う場所であるのはもう分かってるな？」

ええ、非常に嘆かわしいことです。

「ではまず、ここにきたきっかけとされることを話せ」

きつかけと思われるのは、あの時の事故しかない。あのあと気がついたら暗闇にいて、オシャレシヨッカーに拘束されて紅に会ったわけだし。

うわ、オレこの国での歴史浅っ！笑っちゃうくらい浅い！ハハハ、楽しくなるね！

このありがちなきつかけとオレがいた『日本』をかいつまんで説明すると、紅は興味深そうに色々と質問を投げ掛けてきた。

「政治は主に、国民が選んだ人間がするのか。それは効率的だな」

「いやー、案外そうでもないよ？自分達で選んでるわりには色々と不満も出てくるわけだ」

実際どう転ぶかなんて、行動してみないと分からないものだ。人なんて簡単に変わってしまうこともある。

「それはさておき……こちらとそちらの日本を比較すると、微妙に似通ったところはあるようだな」

そうなのだ。名前は同じだが、成し遂げたことが違う偉人がいたり、日本人なら必ず知っている人物をお互い知らなかったり。ちなみに地名などはほぼ同じだが、起こった歴史などはまったく違う。坂本龍馬と中岡慎太郎が世紀の大悪党コンビだったなんて聞いた時は、思わず心の中で「そんなはずないぜよ」と叫んでしまった。ま

「こっちの日本の夜明けは遠そうですが。何しろ鎖国の真っ最中なので。」

「いつもと違うことをしたりしなかったか」

「いつもと違う……」

いつも通り健人にかかわれて、いつも通りチャリで爆走して、いつも通り。

「あー！ーっ！ばあちゃんの鏡っ！！」

「……うるさい」

「あああああのさ、オレがいた部屋に手鏡落ちてなかった！？和柄の巾着に入ったこれまた和風の綺麗な鏡なだけどっ」

どうしよう、あんな派手に事故ったから割れてるかもしれないっ！

「落ち着け。何か無くしたのなら、悪いが諦める。あの部屋は立入禁止だぞ」

「ええっ！？」

そんなあ！

「第三倉庫は国王の私物を置く場所だ。通称『禁室』。よほどのことがない限り立ち入りは禁止されている」

だからこそ泥扱いされたのか！

鏡を持ち出したことが『いつもと違う行為』だったことを告げると、紅は一つの仮定を立てた。

「これは想像に過ぎないが……こことお前の世界は、パラレルワールドになっているんじゃないか？」

「……そりやまたファンタスティックね」

「私だって信じられない。いくら技術が発達しているとはいえ、時間や空間を超えることはありえない」

……魔法はアリなんですか。

実際にしたわけではないが、魔眼というのは魔法のようなもの

だつて言っていたし。

「だがお前の話を信じるなら、他に説明がつかない。同名の人物、同じ土地名。何より反転した文字と世界地図。もしかしたらその鏡を媒体として、一番繋がりやすい世界に来たんじゃないか？」

「繋がりやすい？」

「パラレルワールドとは似て非なる世界。無限に広がっている。…と、言われている」

さすがの紅も最後は自信無さげだった。

「もしそうだとすると、こちらの『篠原上総』はお前の世界に行っている可能性が高いな」

「うええ！？」

「同じ世界に同じ人間は存在できないだろう。もしかしたらドッペルゲンガーというのは、何かのきっかけでお前と同じ状況になった者が作り出したものかもな」

会つと死ぬつていうアレですか。だとしたらこっちのオレ、ぜひとも元の日本に飛ばされてくれ。お互い帰れるのが一番だけど。

「私はこちらの篠原上総を調べてみる。お前はあまり外に出ない方がいい」

「え、危険だから？」

「それもあるが、元の世界で親しかった人物とはこちらの上総もなんらかの関係があるだろうからな。こちらでも坂本龍馬と中岡慎太郎は親しかったと言っただろう。もし知り合いに会ったとしても、向こうが知っているのは別の『上総』だからな」

「まあな……」

「どちらにせよ、一週間で帰れなければお前は感染する。もしこちらの上総が能力者ならば、お前もそうであるはずだ。身を守る術があるのなら、知っておいた方がいい。調べ終わるまで城に滞在している。禁室の立ち入り許可もどうにか打診してみる」

初対面なのにあまりに親切な紅に感動する。

見た目は子供頭脳は大人な冷めたガキだと思ってたけど、なんだかんだ言っても純粹な子供なのね！悪い人に騙されちゃダメ、絶対。」「うう……お兄サンは猛烈に感動したよ。こんな話を信じてくれた上に、そんなに親切に……」

すると紅はにやりと笑った。

「謎を解明するのは、科学者の仕事だからな」

訂正。純粹な親切心だけではなく、探求心からだったようです。

生でもなく、死でもなく？

紅に案内された部屋は家具や電化製品が一通り揃っていて、暫く生活に困らなそうだった。見慣れた家電とは形が違うものがほとんどだったが、何に使用する物かはなんとなく分かる。

おまけに水道やトイレもしっかり完備されていて、部屋が無駄に白くて病院のようだというのを抜かせば、ホテルの一室のようだった。

「指紋、網膜認証の登録は今日中にしてやるから、暫く部屋から出るな。一回出たら認証するまで入れないぞ。それからこれは滞在許可証。これがあれば9階からこの階までは自由に行き来できる」

ここの階の数え方は少し特殊で、9階というのは普通でいう1階のことらしかった。地下が8階まであるので、下の方から順に数えていった数らしい。

ちなみに紅に連れられていった研究所は4階から8階までぶち抜いて造つてあるらしい。だから天井が異様に高かったのだ。

もちろん研究所以外はきちんと一つずつの階として機能しているので、4階から8階は研究所を避けた構造になっているらしい。

「りょーかい。大人しくしときマース」

紅から滞在許可証とやらを受け取り、部屋の鍵代わりとなる認証作業が終わるのを待つことにした。

……………トイレに行きたい。ああ、厠。便所。言い方は様々なれど、とにかく用を足したい。ベッドにだらしく寝転がっていたオレは、勢いよく身体を起こした。

そして日本人の悲しい性か、オレは凡ミスを犯してしまった。

トイレは部屋の中にあつたはずなのに！

そうそうホテルに泊まる経験なんて無かつたオレは、何も考えずに普通に部屋を出てしまった。

眠かつたこともあつてぼーっとしていたせいだろう。はっと気付いた時には、すでにドアは完全に閉まつていた。

ああああ、なんたることだ。紅に連絡……いや、行けるのは9階までだ。紅のいる地下には入れない。

がつくりとうなだれていると、オシャレショッカーの制服が目飛び込んできた。

おーのー！

先ほど手荒に扱われたせいですっかりトラウマになっていたオレは、思わず見つけた隙間にすばやく隠れる。

もう行つたかとおつそり覗き見たオシャレショッカーは、視線を感じたのか一瞬だけこつちを振り向いて去つていった。

「……………っ」

一瞬見えた、その顔は。

見間違えるはずがない。17年間、一緒だった。

「タケ……………」

幼なじみの顔だった。

分かってる、分かってるんだ。自分に学習能力が無いことくらい
っ！

オレは現在、幼なじみを追跡していた。

当然外にいるわけで。城を出ちゃったわけで。不穏な街の空気を
感じ取ってるわけで。

うわゝ！今だけオレをKYにしてください、神様！なんならKY
線も甘んじて受け入れます！

戦争というものが身近なせいか、街はどこか殺伐としていた。空
気が重苦しい。

荒れているどころか街は整然としているのに、コンクリートの建
物が多いせいか、冷たく感じる。

思わずタケを追い掛けてしまったが、これからどうすればいいの
か。

城に戻るうにも、滞在許可証は置いてきてしまったし、持ってい
るからといって簡単には入れないだろう。確か今度は入城許可証な
るものが必要だったはずだ。出るのは簡単、入るのは困難。

散々考えて、自分の脳ミソに絶望する。オレ、ザル過ぎる。

すっかり自分の思考に閉じこもっていたら、タケの姿を見失いそ

うになって慌てて走る。

タケが曲がった角に思い切り飛び込むと、突然胸元を掴まれて近くの建物の壁に身体を押しつけられた。

「いつ……！」

痛みに顔を歪めると近距離から低い声が聞こえた。

「てめえ、誰だ。さっきから人のあとついてきやがって」

聞き覚えのある声。

恐る恐る見上げると、確かに見慣れた幼なじみの顔がそこにはあった。

だけど……。

オレを知らない……？

実に不本意だが、家族以外で一番近い人間といえばタケだった。

紅は確か、親しい人間はどの世界でも繋がりがある可能性が高いと言っていた。

理屈はなんとなく分かる。例えば同じ両親からじゃないと、オレは産まれてないわけで。そういったことを踏まえた上での可能性なんだろう。

「健人……だよな？」

まさか実は生き別れの双子の兄弟がいたとかそんなオチじゃないよな！？

疑問符を付けて聞くと、タケは険しい顔を余計厳しくした。

「なんで人の名前知ってやがる」

よかった。とりあえず双子説は消えた。

「いや、てゅーか上総だつて。かーずーさ」

まさかこつちのオレは整形でもしてんのか？

「かずさ……？」

嘘、名前言つても分かんないの？分かれてもどうしたらいいかも考えてなかったけど！いざ知らないと言われるとショックだ。

「……………もしかして、篠原上総か」

なんだ、知ってんじゃん！疎遠にでもなつてたの？

「そう！やつと思い出して……………つてええ！？」

余計に襟元締め付けられました。

「お前、何企んでやがる」

「何言つて……………」

「上総は死んだはずだ。13年前に」

足元から崩れていくような気がした。

だったらオレは、なんで生きてる？

自分に割り当てられた研究室の一室で、紅は目まぐるしく変わる画面を見つめていた。目的の情報を見つけると、手を止める。

「どういうことだ……………」

篠原上総。平祖7年、12月12日死亡。

まるで何かを隠蔽するかのように、その情報以外はまったく載っていない。

紅は椅子に深く腰掛け、ただ画面を見つめた。
ふむ。どうやら。

「厄介なことに首を突っ込んだか…？」

真実はどこにある

「……死んだ？」

「マギウィルスの発見による混乱のせいで、能力者のいざこざに巻き込まれて死んだよ。あいつのばあちゃんも一緒にな」

「やっぱりあちゃんはいないのか。」

「分かつてはいたものの少し落胆して、気になることを質問した。」

「……親は」

「上総はばあちゃんと二人暮らしだった。親がいるなんて聞いたことない」

「……そんな。じゃあ親父と母ちゃんはどこに行っただ。」

「……なんでそんなことを聞く」

「……いや……別に。悪い、勘違いだったみたいだ。忘れてくれ」
タケの手を解こうとするが、なかなか放してくれない。

「ちょ、悪かったって」

「ほんとに上総なのか？」

「は？」

「俺は幼かったし、遺体を確認したわけじゃない。ほんととはあの時……死んでなかったのか？」

「もしタケの疑問が真実なら、こっちのオレは何らかの理由で身を隠していたことになる。でも、なぜ？」

「しかしそれだって、予測の域を出ない。本当に死亡している可能性だってあるのだ。」

「お前どこから来たんだ。行く場所はあるのか」

「いや……まああるにはあるけど戻れないっていつか」

「入城許可証持ってないし。」

「ついてこい。コーヒーくらいなら淹れてやる」

オレは少し笑ってしまった。こつちの世界でも、なんだかんだと悪態吐きつつお人好し。困った奴がいるとほっとけないんだ。

やっと手を放して歩き出したタケに続いて、建ち並ぶコンクリートの森を抜ける。

住んでいた場所とは違って高い建物ばかりだ。

「な、ここってどこ？」

「はあ？」

「何県？あ、城があるってことは東京？」

「お前ほんとどうやってここまで来たんだよ。京都だよ京都。首都も分かんねえのか」

京都。京都が首都だったのは大分前だったような気がするんですが。いや、大分なんて言葉じゃ足りないくらい前？

しかしここは恐らくパラレルワールド。何も突っ込むまい。

「いやー、どうやらオレ記憶喪失みたいです。名前しか覚えてないっぽい。お前のことも咄嗟に呼んじやっただけで、どーゆー知り合いだとか分かんないし」

みたいとかぼいとか非常に曖昧な表現をしてしまったが、記憶喪失という設定で行こうと決めた。それならここでの常識を知らなくても、ある程度誤魔化しがきくような気がする。

「記憶喪失とはまた違うような気がするんだが……」

「いや、絶対そうだって。だってオレなんにも知らないもん」

タケは腑に落ちない表情をしていたが、諦めたようにまた歩き出した。

「もうそろそろ着……」

タケがそう言い掛けた時、激しい爆発音が辺りに響き渡った。

何！？テロ！？

上がる悲鳴。何かが崩れる音。

何やら事件が起きた現場は、ここからそう遠くはなさそうだった。

タケが舌打ちをして喧騒の方向に視線を走らせる。

釣られてそちらを見ると、薄暗くなってきた空に黒煙が舞い上がっていた。

「お前、ちよつとこの辺で隠れて待つてろ！」

ええ！？こんな場所で一人になるのはごめん被りたいんですけど！

しかしオレの泣き言を聞く前に、すでにタケはそちらへ走り出してしまっていた。

「エエー……」

半泣きにもなりたくなるよね。

爆発から逃げ出してきたのであろう人々が、バタバタと走っていく。

そして、再び爆発音。今度は連続で三度ほど音が聞こえた。
てゅーか、音近くなつてない！？

「あーっはっはっはっ！善良な市民の皆さん、こーんにーちわー」

慌てて隠れる場所を探していると、少し離れた位置の建物の上から、高笑いが聞こえた。

5階ほどの高さの建物のてっぺんで、男がふんぞり返って馬鹿笑いしている。あんなところに登って怖くないんだろっか。

というか明らかにヤバイ人だ。だって発言がイツちゃってるよね。

行動もイツちやってるよね。

角度で顔は見えないが、やけに細さが目立つ男だった。いかにも不健康そう。

「今からこの辺り一帯を爆発させまーす。ごちゃごちゃしてて鬱陶しいもんね？綺麗に更地にしてあげます。あっちにもこっちにも仲間がいるから、運悪く巻き込まれちゃったらごめんねー？」

タケはどうやら、最初の爆発を起こしたこの男の仲間とやらの方へ向かったようだ。

「恨むなら王サマを恨んでね」
なんと。もしかしてレジスタンス軍とやらですか。

「はい、れつつしょーたーいむ」
頭の悪そうな発音と共に男が手を叩くと、立て続けに周囲の建物が崩れ落ちた。

あちこちで悲鳴が上がる。逃げ惑う人々は、パニックになっているせいで余計効率悪く避難していた。

というかこれは、非常にヤバイ状況では。

銃刀法なんていう法律がある平和な国で過ごしたオレは、実に非力だ。ましてや爆発事件なんて。

そして何より、これは爆弾を使用しているのか、噂の能力者とやらなのか。まあどっちにしても死亡フラグに変わりはないけどね！

男が更に手を叩く。

爆発音。

かなり近い

！？

ガラガラと建物が崩れる音が間近で聞こえ、何かがメリメリと剥がされるような音が　　って、ええ！！

頭上に影がかかったと思ったら、すぐ近くの建物の壁が剥がれて倒れてきていた。

身体が硬直して動けない。

そのままへたりこんでしまうと、なんと倒れてきていた壁がぴたっと不自然に止まった。　　はい？

傾いたまま停止している壁を伝って建物の根元を見ると、恐らく紅よりも2、3歳は年下のように見える幼い少女が、壁を押さええていた。

えーっと何これ幻？どんだけ怪力？

少女は完全にひっぺがされた壁を持ち上げると、軽々ぱいっと投げ捨てた。

そしてこつちを見てにこつとあどけなく笑うその顔は　　白
目が真っ赤に染まっていた。

上総に割り当てた部屋に向かっていた紅は、騒々しさに足を止めた。

慌ただしく走り去ろうとする軍人を一人呼び止める。

「おい、何があった」

「能力者による爆破事件が起こったようです。怪我人も多数いるようです。今通報がありました」

「……そうか。分かった」

紅が行っていいぞ、と声を掛けると一礼して走り去っていく。

（最近多いな）

能力者による破壊行動が頻繁になってきている。

恐らくレジスタンスによるものではないだろう。レジスタンス軍は一般市民を巻き込むことはしない。

レジスタンスによるものならば、目的は国への訴えだとはつきりしているが、こつも無差別だと見当もつかない。ただの遊びか、何か目的があるのか……。

何はともあれただの研究者である紅にできることはない。エレベーターに乗り込み、目的の階へと急ぐ。

上総の部屋の前で足を止めると、室内に連絡を取るためにボタンを押した。

「水瀬だ。認証が終わったぞ」

暫く待つが、返事がない。

「……開けるぞ？」

寝ているのかと思い、持ってきていた小型の機械に長々としたパスワードを打ち込んでいくと、ドアが開いた。

紅の目に飛び込んできたのは、ほとんど使われた形跡の無い無人の部屋だった。

迷子は動くべからず

ちよちよちよ、お嬢さん、目が尋常じゃないくらい充血してますよ！？もしかして目の色が変わるって、白目のこと！？先に言っておいてください、紅さん。

現在オレは、びっくり仰天怪力少女と対峙していた。
あどけない顔で微笑んでいるはずなのだが、いかんせん白目が真っ赤で怖すぎる。明らかに敵キャラの風貌だ。

オレが固まっていると、少女の瞳は徐々に赤みが治まって白を取り戻していた。

近寄ってきてオレの手を引くと、立つように促してきた。

「ここ危ないよ。ナナ、安全な場所知ってるから一緒に行こ？」
どうやらナナというらしい少女は、安全な場所に案内してくれるらしい。

だが、オレは躊躇った。タケに動くなと言われているし、いくら子供とはいえ見知らぬ土地で知らない人についていくのってどうかと思うし。

その時、再びごく近くで爆発音がする。

そしてオレは、恐怖に負けました。

「お願いシマース……」

裏道らしき場所をくねくねと抜けてナナに案内された場所は、ひっそりと佇む一般的な民家だった。

民家と言ってもこっちの基準であり、見慣れたものと違ってやはり主な素材がコンクリートでできているらしく、あまり温かみは無い。

ナナは少し厚めの透明ピンクのプラ板のようなペンダントを服の下から取り出す。5?ほどの大きさだろうか。子供用のおしゃれに作られたような可愛らしいそのペンダントは、ハートを型取っていた。

そのペンダントヘッドをドア横の黒くてツルツルした機械にかざすと、ピツと電子音がしてドアが簡単に開く。そのまま躊躇いもせず、ナナはオレの手を引いて中へと入って行く。

「えーと、ここはナナちゃんの家?」

「うーんと……みんなの家」

こてんつと首を傾げる様子が可愛い。あんな馬鹿力を発揮するとはとても思えない。

みんなの家とはどういうことだろう。いざという時の避難所ということだろうか。

リビングに通されるのかと思いきや、そのまま寝室まで引つ張って行かれる。

「えーとなぜ寝室……」

無機質に置いてあるベッドは、使用された形跡が無い。

ナナはなぜかクローゼットを漁りだした。たくさんある服を掻き分けて、下に置いてある物も退かしていく。

何かを発見したようで、ナナはぴたっと手を止めた。

不思議に思つて覗き込むと、クローゼットの中の床には不自然に切れ目が入っている部分があった。何かを差し込むような深い溝もある。

ナナが再びペンダントを取り出し溝に差し込むと、床の切れ目が横にスライドした。一人が通れるくらいの穴が開き、中は階段になつてるのが見える。

「ここを降りるの」

先にナナが階段を降りていくのを見守つて、多少躊躇いつつも後に続いた。

2階分程度の距離の細い階段を降りると、一つのドアに辿り着いた。

ここで再びペンダント登場。大活躍だな。
今度はかざすだけのようで、ここに繋がる家の入り口と同じような機械が設置されている。

ドアが開くと、エレベーターだった。

王宮とは違い、このエレベーターは無駄にボタンが多くはなかった。

ナナがボタンを押すと、程なくして下降を始める。

エレベーターが停止してドアが開くと、薄暗い廊下が現れた。

「パパ！」

「は？パパ？」

目が慣れなくてよく見えなかったが、どうやら人がいるようだ。それも結構人数がいる。

その内の一人に、ナナは走り寄つていった。

「ナナ、偉いね。ちゃんとお使いできたんだ」

ナナの父親らしき人物は優しくナナを抱き上げる。

そしてオレの方に視線を移してくる。

「こんにちは」

「……こんにちは」

一見優しく『見える』笑顔。だけど目が 笑ってない。

あーぶりばり嫌な予感。もう嫌な予感しかないよ。

目の前の人物の白目が青白く光った気がするが、確認する前にオレの意識は闇に落ちた。

裏切りとも言えない

なぜこうなる。

現在オレは、分厚いガラスで覆われた部屋に閉じ込められています。

ああああもうっ！目が覚めたらなんてパターンはもういらねえんだよ！

ガラスの向こうには数人のおっさんと、私服に着替えたらしいタケがいる。

「おはよう。気分はどうか？」

部屋に設置されたスピーカーから、ナナの父親とかいう男の声が聞こえる。

「いやーまあいいワケはないですよね」

へっ。

多少やさぐれながら答えると、ナナの父親は苦笑した。

「悪いね。我々の不利になると思われる人間を野放しにするわけにはいかないんでね」

なんでオレがこいつらの不利になるんだ？

「……おい、偽物」

タケが口を開く。

「はあ？偽物？」

「なんのつもりか知らないが、上総のふりをして近づいてきたんだ。目的を話すまではそこで過ごしてもらおう」

……つまりオレは信用されてなかったわけだ。

「つーか何、お前の上司とかの指示なわけ？仕事熱心ねー、軍人サ
ンてのは。なんて言うか、政府の犬？」

「あんな奴らと一緒にすんじゃねえ」

「……だってお前軍の人間じゃないの」

「……潜入捜査だ。俺は本来レジスタンス軍の人間だからな」

「へー。子供を危険人物のお迎えに寄越すような奴らより、お前が
お嫌いな役人さん達のがよっぽどまともだね。レジスタンスなんて
かつこいいこと言っつて、自己満足のテロリストだ」

「てめえ……」

この際オレが裏切られたことは置いておこう。死んだと思ってた
奴がいきなり現れたら、誰だっつて簡単には納得できないし。それは
裏切りとさえ言えないのかもしれない。だけど、子供を危険な目に
合わせることは理解しがたい。

「……自分の立場が分かっているかな。不用意なことは言わないこ
とだ」

ナナの父親が忠告してくる。

「今後のことは話し合っつて決める。悪いけど、暫くそこにいてもら
うよ。食事なんかは用意するから心配しなくていい」

タケはもう何も言わなかった。

人がいなくなつたところで、ようやくオレは一息吐いた。そして
自分の行動にしみじみ後悔する。

なんだかんだで城でも不審人物だったわけだし、いきなりいなく

なつて紅に迷惑をかけてしまっただろうか。

てゆーか。

「むっかつく~~~~!!」

誰もいないのをいいことに大声で叫んでやる。

何、タケのあの態度！？元の世界のタケが可愛く見えるね！つんけんしちやってさ、ヤな感じ〜。

心の中で散々悪態をついていると、ガラスの向こうのドアが開いてナナが入ってきた。ナナと同じ歳くらいの見知らぬ少年も一緒だ。

口をパクパクさせてこっちに何か言っているようなのだが、当然スピーカーを通していないので聞こえない。

しゅんとうなだれるナナを通り越して、少年がガラスに手をついた。少年の白目が青白く変化する。能力者か。

何をしているのか分からずにぼんやり見ていると、少年の目が元に戻る。ガラスから離れると、今度はナナがガラスに手について横に引つ張った。最初に見た時のように白目が真っ赤に染まる。んー、いつ見てもちよつと怖い。

音も無く分厚いガラスが開いた。

「え」

「お兄ちゃん！」

ナナが飛び付いてきた。

「ナナ？何これなんで……っ！か勝手に開けていいのか！？怒られるんじゃ……」

いや、オレ的には非常に助かりますけども。

「あの、ごめんなさい……。ナナはお兄ちゃんが仲間になるんだとばかり思ってた……」

なんていい子なんだ！罪悪感を感じてわざわざ助けにきてくれた

のか。

「あのね、あの子は陸りくっていうの。鍵開けの能力者だよ。お兄ちゃんのこと助けたいって言ったら協力してくれた！」

「そっか。ありがとな、ナナ、陸」

礼を言々とナナはえへへと可愛らしく笑い、陸はこくりと頷いた。む、無口な子だな。

「つーか、見張りとかいたんじゃないか？どうやって入ってきたんだ」

まさか不審者を見張り無しで放置なんてしないだろう。

「あのね、お姉ちゃんがなんとかしてくれたの！監視モニターもお姉ちゃんがいじってくれた！」

お姉ちゃん？まだ協力者がいるのか。

その時力ツン、と靴音が響き、誰かが部屋に入ってきた。

そちらを向くと、オレと同じ歳くらいの美少女が……って。

「水瀬碧瑠みなせへきる！？」

そこにいたのは、元の世界で同級生だった水瀬碧瑠だった。

孤高の花

同級生と言つても、水瀬とはほとんど関わりが無い。せいぜい課題提出で言葉を交わす程度だ。

水瀬は人当たりがよく、容姿もいいのでよくモテた。少しくらいやつかみを買ひそうなものだが、可愛い系にも関わらず性格がサバサバしているせいか、女子の受けもいい……はずだったのだが。

「どこかで会つたかしら」

無表情！そして声に抑揚が無さ過ぎる！

「いやあの……気のせいでした」

「ふーん……」

オレの顔を見ながら思い出そうとしなくていいから！顔面！顔面にもつと氣い使つて！

おかしい。水瀬はいつもにこにこしていたはずだが。てゆーかこの無表情、紅よりもヒド……ん？よく考えたら、『水瀬』？しかもよくよく考えれば、顔も似てる氣がする。

「……もしかして妹とかいる？」

「いるけど。すごく可愛いのが一人。今は城で働いてるわ」

シ……シスコンか。

「妹は『国』側で、姉は『反国』側なんだ？」

「あの子のこと知ってるのね」

「え……と、まあね」

「まああの子は有名だしね。私も元は城で働いてた。色々理由があるのよ」

まーその辺は突っ込まないでおくのが大人つてもんだよね。てゆーか有名人なのか、紅。タダ者ではないと思つてはいたが。

「というか、さっさとそこから出てくれない？ずっと居たいなら別

にいいけど」

三食昼寝付きを手放すのは中々おしい……じゃなかった。

「出ます出ます！」

ナナの手を引いて慌ててガラスの間を通り抜ける。

「陸ちゃん、ありがとう！」

「どういたしまして」

笑顔で礼を言うナナに対し、陸は無表情で答える。つーかこの国無表情率高くねえ？

「ついてきて」

水瀬はさっさと踵を返すと、足早に歩き始めた。

忌まわしきガラス張りの牢獄がある部屋を抜けると、長い廊下が広がっていた。

「なあ、なんで助けてくれんの？」

「説明はあと。めんどくさいから」

ちょ、最後のそれ言う必要ありました！？めんどくさいって言つたよこの人！思いつきりへこましてダメージを与えようって手か！？

長い廊下を右や左にひたすら曲がり、途中エレベーターに乗ったりして目的地を目指す。なんかオレここに来てから異様にエレベーターに乗ってる気がする。高い建物が多いから仕方ないのか？いや、気を失ってる間に移動してなければ、普通に考えてここ地下だよな。どんだけ穴掘った。

水瀬が立ち止まる。どうやらここが終着点のようだ。

水瀬はナナが持っていたようなプラ板を取り出す。ナナの物より少し大きめで、形は長方形でカードのようだったが、同じような役割をすることが伺える。ドア脇に付いている装置にスライドさせる

と、シュン、と気持ち良くドアが開いた。

「入って」

水瀬が続いて部屋に入ると、後ろから跳ねるようにピヨピヨコついてきていたナナと、ナナの後ろを静かに歩いていた陸も一緒に入ってくる。

その部屋は、様々な機材やモニターで溢れていた。モニターにはあちこちの部屋や廊下の映像が映し出されている。どこかの街の風景も映っていた。

その辺にあつた椅子に全員座らせると、水瀬は機械の前に向き直る。ものすごい速さでキーボードを打ち出した。

「ここに指置いて」

言われるままに小さな箱のような機械に指を置く。

水瀬がさらにキーボードを打ち込んでいくと、あちこちにある機械の一つからカードが吐き出された。よく見ると、先程水瀬が使っていたプラ板と似た物のようだ。

それを取り出すと、水瀬はオレに差し出した。

「これあげる。これが無いとここでの生活は厳しいから」

「これなんなわけ？」

「鍵や身分証明の役割をしてる。指紋登録してるから、本人以外が触っても機能しないわ。これで人を認識するから、各個人で入れる場所や入れない場所がきっちり分けられる。例えば、この部屋は私と他数名の限られた者のカードでしか開かない。ナナや陸のカードではエラーが出るの。ちなみにこれはパーソナルカード、一般的にPカードって呼ばれてる。無くさないでよ」

「もちろん。個人情報流出禁止ですよー」

「本人の指紋以外では機能しないって言ったでしょ。高いのよ、それ」

「エ……ち、ちなみにおいくらで」

「聞きたい？」

「イイイイエ。聞きたくないです」

何しろオレは現在無一文だ。しかも水瀬の言い方だと、財布を持つていても、へそくり出しても全然足りなさそう。それ以前に、恐らく金銭の類も鏡文字になっている可能性が高いから、使用不可能どちらにしろオレには、人から与えられた物に文句をつける権利は無い。

「もつと小型で、加工してアクセサリーにできるタイプもあるんだけど、そっちはもつと高いわね」

「ナナのは？」

「あれは普通タイプの物を加工してあるの。無くすよりはいいって同じようにしてる人も結構いるけど、ある程度の面積は残しておかなきゃいけないし、曲げたりもできないからちよつと大人向きではないでしょ」

なるほど。水瀬の物より少し小さく見たのは、加工したからかたぶんハートは横幅で面積をとっているから、比べたら対して変わらない大きさになるんだろう。

「水瀬はどうしてんの？」

「チエーンつけて服のどこかにぶら下げてる」

ほら、と服を捲って見せてくれるが、やめてくれ。一応健全な青少年だから。

「ナナもナナも！見て見て、可愛い？」

ナナがペンダント型のPカードを掲げるように見せてくる。

「可愛い可愛い」

頭を撫でてやると、ナナは嬉しそうに笑った。

こんなに可愛いのに怪力……。

しかしオレが水瀬の説明を受けている間、子供達は妙に静かだった。わきまえる場所はすっかりわきまえてるっていうか、その歳にして悟り過ぎだろ。なんだかホロリと泣けてくる。陸はいるんだかないんだか分かんないくらい存在感消してるし。

「り……」

つつい構いたくなって陸に話し掛けようとしたら、いきなりドアが開いた。

「碧瑠！」

タケが血相変えて飛び込んできた。

「お前どういうつもりだ！？こいつを勝手に出すなんて！」

「別に。説明も無しに誘拐して閉じ込めるなんてやり方が気に入らなかっただけ」

「……それは俺達を裏切ると見なしでいいのか」

「好きにしたら」

「お前自分の立場を考えてんのか！これで更に反感買うぞ！」

「始めから対して信用なんてされてない。国お抱えのエンジニアだった私がここに来た時から、ずっと」

「碧瑠！」

え、ちょ、何。修羅場？いや、明らかにオレにも原因があると思われるんだけど。しかしエンジニアだなんて、姉妹揃って頭がいいしかもその歳で。

「……今すぐこいつを戻せ」

「予測だけで人権を無視するの？彼は何も知らないかもしれないの

に、そんなのフェアじゃない。彼には不自由じゃない生活をするだけの権利があるわ」

「……勝手にしろ！」

タケはオレを射殺しそうな目で睨んでから、イライラと部屋を出ていった。

……なんとなく分かってしまった。あいつ、水瀬のこと好きだろ。タケは気を許している相手にほど、心配な時は熱くなる。ただの勘だけど、どっちのタケも本質は変わらない気がする。

「お姉ちゃん……」

ナナがオロオロと口を開く。陸の手をぎゅっと握り、心配そうに水瀬を見ている。

「大丈夫よ」

「ごめんなさい……」

俯くナナの頭を撫でて、水瀬はこっちに向き直る。

「疑問がたくさん？」

「まあ正直。でもオレが聞いてもしようがないことだと思っし、聞いてなんとかなることでもないような気がするし。それに水瀬も、疑問がたくさんあるくせに何も聞いてこないじゃん」

「お互い様ってことね」

「そうそう。『フェアじゃない』のは嫌いなんだろう？」

「そうね」

お、ちよつと笑った？口角が微妙に上がったんだけど、初めて柔らかい表情を見た気がする。

しかし、孤立してでも信念を貫くとは、武士よのう。いい女になるよ、絶対。タケの奴うかうかしてらんないな。

「さあ、じゃあ行きましようか」

突然水瀬が立ち上がり、ナナと陸も椅子から飛び降りる。

「え、どこに？」

「住む場所が必要でしょ」

今までいた建物を出ると、そこには意外な光景が広がっていた。

「……何これ」

眼前にあるのは、オレが見てきたこっちの街の風景とは似ても似つかない、活気のある街。あちこちで明るい声が聞こえ、笑い合う人々が見える。点在する飲食店からは、美味しそうな臭いが漂ってきていた。

しかしこれだけなら、まあどっか元気な街に移動してきたんだな、と思う。しかし不自然な点は、この街には天井があるということだ。ナナと陸は、すでに飲食店の一つに走って行って試食品をもらっている。

オレが呆然としていると、水瀬が言った。

「ようこそ。レジスタンス基地、地下街『帳』^{とばり}へ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0607y/>

コネクト。

2011年11月24日18時54分発行